

【茨城】「どんなときも患者の心の支えになりたい」赤ひげ大賞受賞者の志と今後-鈴木直文・慈泉堂病院院長に聞く◆Vol.3

2021年4月2日（金）配信 m3.com地域版

開業以来32年にわたって24時間の救急医療を続け、在宅医療も行いつつ「高齢者の憩いの場を」と介護老人保健施設も運営する。交通の便の悪い地域性を考慮して患者の無料送迎も行う。自宅は病院の敷地内に建て、いつでも有事に対応できるようにした。第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞した「慈泉堂病院」（大子町）の理事長・鈴木直文氏を突き動かしているものは何か。大子町に大きな被害をもたらした台風19号の対応も聞いた。（2021年2月16日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——慈泉堂病院のある大子町は2019年の台風19号で大きな被害を受け、今も町を通るJR水郡線の運行は寸断されています。赤ひげ大賞受賞に関する資料を読むと、このときの対応も評価されたようです。

当院も大きな被害を受けました。河川氾濫によって腰まで水に浸かる状態で、外来やCTなどがある検査室を含めて1階は軒並み機能が止まりました。唖然としました。ただでさえ経営の厳しい病院です。へどろで埋まった院内を見渡して「この先どうなっちゃうんだろう…」と思いました。

スイッチが入ったのは大子町や消防本部の職員が来たときです。「先生、アフターファイブはどうにかなる？」と救急対応について聞かれ、われに返りました。「こりゃいかん」とモップを持ち、「みんなついて来て」と職員に呼び掛け急患室から掃除を始めました。水をぱっとまいてまずは床を整備し、次に物品を一つずつアルコール消毒しました。

カルテはほとんど水没し、薬品も3分の2は廃棄処分。離れにある木造の事務棟は水で腐って使えなくなりましたが、なんとか3日後には外来・救急ともに患者さんの受け入れを再開することができました。すると、すぐに気管支ぜんそく発作で苦しんでいる患者さんが搬送されました。再開翌日には90人もの患者さんが来院しました。「間に合っただけ良かったな」とやや安堵したことを覚えています。



理事長の鈴木直文氏

——そんな困難も乗り越えてきたんですね。同院には現在どんな課題があるのでしょうか。

他の医療機関の多くもそうだと思いますが、やはりマンパワーです。当法人はありがたいことに多くのスタッフが集まってくれ、今ではおよそ190もの方が働いてくれています。母校の聖マリアンナ医科大学の協力もあり、医師も充足しています。しかし、看護師が足りない。町にあった看護学校が2003年に閉校して以来、看護師の補充が利かなくなりました。今は見渡しても本当に医療人材がいない状況で、将来的には法人間の合併も視野に入れる必要があるでしょう。

それと、今後は治療だけでなく医療の原点である予防にも一層、力を入れていきたいと考えています。具体的には、日本人の死因上位を占めるがん・心筋梗塞・脳卒中を減らすため、これらの病気と予防策について啓発していく予定です。ご高齢の方に外来で5分10分話しても頭には残りづらいですから、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたから集会所などで1時間ほどお話しする草の根運動を展開していきたいです。

——先生は「患者さんのために」の一念でさまざまな活動を行ってきましたが、一人の医師としては診療するときにどんなことを心がけていますか。

まずは聞くこと。開業当時は患者さんがどんな方か分かりませんから、診療時間や会話の総量が10あるとして、9は患者さんのお話を聞いていました。私が話すのは1だけ。それが5年たつと患者さんのお話を5聞いて、私も5話す。そして10年経つと、患者さんが1を言えば、こちらは9話せるようになるのです。これが信頼関係の表れだと思います。

病気の問題と答えは患者さんの中にありますから、患者さんを知ることが医療の出発点。患者さんのお話をよく聞いて、信頼関係を築くことが大切ではないでしょうか。

——人が少ない開業当時から24時間の救急医療を継続し、在宅医療も行う。高齢患者の憩いの場を作ろうと介護老人保健施設を作り、交通の便の悪い患者は無料で送迎する。自宅は病院の敷地内にあり、いつでも有事に対応できるようにする。何が先生をそうさせているのが興味があります。

それは私の恥かもしれません。昔、親戚のおばさんから言われたことがあるんです。「あなた、本当にかわいそうね」と。何がかわいそうか私には分かりませんから「どうしてですか？」と尋ねました。おばさんは「遊びにも行けないから」と言いました。

このときに改めて思いましたが、私は患者さんを診ることが仕事であり、遊びに行くことがそうではありません。アフターファイブに私的な予定を入れていけば仕事がしづらくなりますから、それは私にとっては逆にストレスになるのです。

——「医師であることが人生」という印象を受けました。

そうだと思います。やっぱり休みなく患者さんのために働いていた父の存在が大きいのでしょう。赤ひげ大賞の受賞を最初に報告したのは父で、自宅のたんすの上にある小さな仏壇に線香をあげて、「これは親父がもらうべき賞だったね」と伝えました。

赤ひげ大賞はひと昔前であれば今よりもっと多くの人を受賞に値していたのではないのでしょうか。今も医師として父より優れているとは思いません。

私が理想とする医師は、どんなときでも患者さんの心の支えになり、どんなときでも手を差し伸べられる医師。まだまだやるべきことがあると思います。でも、この賞をいただけたことで、「やっと医者になれたかな」とも思います。私が過去32年にわたって行ってきたことが認められたわけですから、医師としてやっとスタートを切れた気がしますね。

◆鈴木 直文（すずき・なおぶみ）氏

1979年聖マリアンナ医科大学卒。1986年同大大学院修了。聖マリアンナ医科大学病院勤務などを経て1989年に慈泉堂病院を開院。1996年に医療法人聖友会を設立し、理事長に就任。24時間の救急対応や在宅医療、介護機能の充実化などに取り組み、地域医療に尽力してきた。2021年に第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞。専門は消化器外科と内分泌疾患。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

